

家庭における生きものの世話と「命の教育」の実態

藤岡真実¹, 植竹雪乃², 浅野房世^{1,3}

¹東京農業大学農学部バイオセラピー学科 神奈川県厚木市船子 1737

²元 東京農業大学農学部バイオセラピー学科 神奈川県厚木市船子 1737

³東京農業大学大学院農学研究科 神奈川県厚木市船子 1737

The domestic care of living creatures and an "education of life"

Mami FUJIOKA¹, Yukino UETAKE², Fusayo ASANO^{1,3}

¹Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture 1737 Funako, Atsugi-shi, Kanagawa

²Formerly, Faculty of Agriculture, Tokyo University of Agriculture 1737 Funako, Atsugi-shi, Kanagawa

³Graduate School of Agriculture, Tokyo University of Agriculture, Kanagawa

Keywords: Plant, nurturing, education of life, horticultural therapy, horticultural therapist

キーワード: 植物, 世話する, 命の教育, 園芸療法, 園芸療法士

要 旨

本研究では、動植物を子どもと一緒に育てる機会が比較的多い小学4・5・6年生の養育者を対象にアンケートを実施し、家庭において生きものを「育てる（世話する）」ことを通して命の教育が実施されているかを調べ、そのなかで、植物はどのように扱われているかを研究した。その結果、植物を「世話する」思想を子どもに指し示している養育者は288名中、わずか1名であり、植物を「世話する」思想を命の教育として子どもに伝える家庭教育は一般的に行われていないと考察した。

Abstract

In this research, guardians of 4th, 5th, and 6th grade school children completed questionnaires regarding their child's education of "grow" focusing on the treatment of plants to find out how "education of life" is taught to children through the concept of "foster(nurture)." The sample in this group comprises 291 parents who have had significant opportunities to raise plants and animals with their children. Only one parent felt that the concept of "foster(nurture)" is important, indicating that introducing the thought of "growing" as part of an education of life is considered unimportant.

1. 研究の背景・目的

日本へ本格的に園芸療法が導入されて約20年が経過するが、園芸を用いた療法のほとんどは園芸の特徴である時間性を活かしたのではなく、単なる園芸作業の効果を取り上げたものに過ぎない(藤岡ら2010)。現代社会における「育てる」教育の重要性は、松尾(1986, 1990a, b, 1995, 2010)が詳細に述べているが、園芸療法分野で「育てる」教育の重要性が議論されることは少なく、「育てる」ことを通して命の教育に発展させる必要性はほとんど議論されていない。著者らは、植物を「育てる（世話する）」教育が命の儚さや強靭さを伝える機会となり得ること、さらにその教育が将来の園芸療法士という職業を選ぶ適性にも関係すると考え、本研究を実施することとした。

2. 調査対象および取りまとめ方法

1) 対象者の選定

小学校指導要領(2008)第4節 理科の学習(第1)目標には、「自然に親しみ、見通しをもって観察、実験などを行い、問題解決の能力と自然を愛する心情を育てるとともに自然の事物・現象についての理解を図り、科学的な見方や考え方を養う。」とある。子どもたちが生物への興味・関心を抱き、知識的な発達を促す教育を軸に、3・4年は「生物を愛護する態度を育てる」、5・6年は「生命を尊重する態度を育てる」との目標が掲げられている。学年別にみる理科の学習時間数は、3年90時間、4・5・6年105時間であり(文部科学省 学校教育法施行規則2010)、学校教育においては、4・5・6年生が安定的に「育てる」教育が行われていると推察できる。そこで、調査対象は小学4・5・6年生の子どもをもつ親もしくはそれに代わる養育者(以下、養育者)とした。

2012年4月1日受付. 2012年6月20日受理.

日本園芸療法学会誌5: 25-29. 2013. 事例研究.

2) アンケート調査の内容と方法

養育者が日常生活のなかで育てる思想(生きものを敬い、世話すること)を子どもにどのように指し示しているか、養育者自身が育てる教育の必要性をどのくらい感じているか、これらを窺い知るために、選択回答と自由記述の設問を用意した。本アンケートで尋ねる「育てる」対象(生きもの)は、義務教育のなかで定められている動物と植物に加え、兄弟姉妹がいる場合などを想定し、人も加えた。

選択回答の設問では、i) 命の尊さについて家族で(子どもに)話す機会がありますか?、ii) それはどのような機会ですか?、iii) その時、きちんと説明できましたか?、iv) 植物・動物・人(兄弟や親せき)のうち、一番説明しやすいのはどれですか?(複数回答可)を問うた。

次に、養育者に3~4歳頃の子どもを思い出してもらい、その頃から現在に至るまでに、植物・動物・人、それぞれの生命の誕生と終わりに子どもと一緒にかかわった経験があるかについて尋ね、経験があると答えた養育者には、具体的な場面とエピソード、子どもや養育者との関係性を書いてもらった。これらの質問は養育者の心に深く刻まれた思い出を窺い知ることが目的であるため、選択回答ではなく自由記述とした。

最後に、現在の子どもの感受性について、養育者の評価を直感で答えてもらうためにVAS法(Visual Analog Scale)を用いた。同評価法は、緩和医療分野で使われる痛みの尺度を応用したものであり、100mmの直線を提示し、左端を「ある」右端を「ない」とし、直視で線を入れてもらい、右端から線までの数値を測定した。数値が高いほど感受性が高いと養育者が評価していることになる。なお本稿では、感受性を「外界の印象を受け入れる能力、物を感じ取る能力、感性」(広辞苑第5版2004)の意味で用いる。

3) 調査方法

神奈川県横浜市南瀬谷小学校に協力を依頼し、小学4・5・6年生の児童448名に対して、アンケート用紙(A3用紙1枚)と依頼文書(A4用紙1枚)を担当教諭から配布してもらった。依頼文書には、本アンケートが子どもに命の尊さを伝え教えるためにはどのような教育方法が適しているかを調べる目的であること、調査結果は本研究目的以外には使用しないことを明記した。

また、回答は子育てに最もかかわっている養育者にしてもらい、個人が特定できる情報(名前、住所など)を記入しないようお願いした。なお、兄弟姉妹がいる家庭についてはアンケートが重複しないように、あらかじめ配布を高学年の子どもに限定し、各家庭に持ち帰ってもらった。アンケートの回収は、配布から1週間後(2011年12月14日)までに、子どもから担任教諭へ提出してもらう方法をとった。

3. 結果および考察

配布数448枚のうち回収数は291枚、回収率65.4%であった。学年別の配布数、回答数、有効回答数は以下に示す。

4年: 配布数152枚, 回答数101枚, 有効回答数98枚

5年: 配布数156枚, 回答数94枚, 有効回答数94枚

6年: 配布数140枚, 回答数96枚, 有効回答数96枚

今回の調査は学年による差をみるものではなく、各学年で回答内容と傾向に顕著な差異も認められないことから、有効回答の総数288枚の結果をまとめて考察する。

1) 命(生命)の話をして全くしない家庭はない

選択回答の設問i) 命の尊さについて家族で(子どもに)話す機会がありますか?に対する回答は、a. よくする44名(15%), b. まあまあする128名(44%), c. ふつう91名(32%), d. ほとんどない25名(9%), e. 全くない0名(0%)であった(図1)。命の尊さについて子どもと話す家庭は59%と半数以上を占め、32%の家庭がふつうと答えた。ほとんどないと答えた養育者は9%であり、全くないと答えた養育者は0%であった。このことから、どの家庭でも「命(生命)」について子どもと話す機会は何らかの形で設けられていることがわかった。

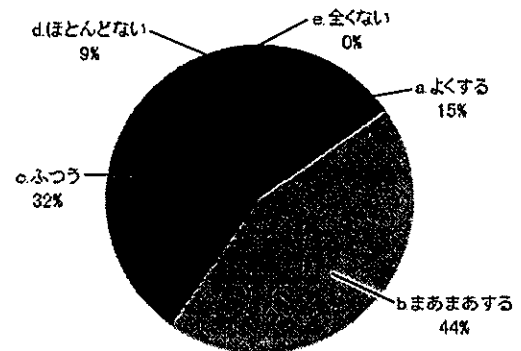


図1. 命の尊さについて家族で(子どもに)話す割合. n=288

次に、ii) それはどのような機会ですか?(複数回答可)との設問では、a. ペットを飼う116名、b. 食事103名、c. テレビ237名、d. 新聞47名、e. 兄弟姉妹が産まれる33名、f. その他35名、との回答が得られた。そのなかでも、テレビは288名中237名が選択しており、どの家庭でも話題にしやすかった。

f. その他の回答例には、「親族が亡くなった時や法事など」、「本人(息子)の事故」、「生活の中でその場その場、感じた時」、などがあつた(図2)。

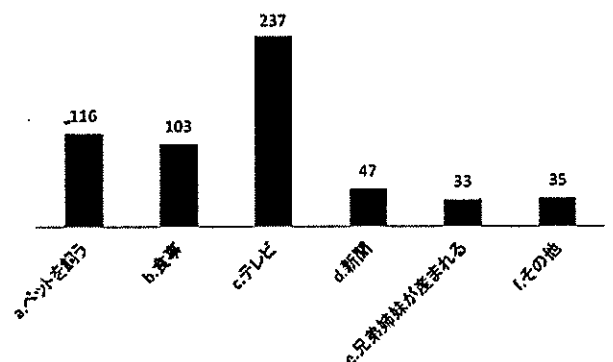


図2. 命の尊さについて話す時. n=571(複数回答)

さらに、iii) その時にきちんと説明できましたか?との設問には、a. よくできた 34名(12%), b. まあまあできた 159名(56%), c. どちらともいえない 83名(29%), d. あまりできなかった 6名(2%), e. できなかった 1名(1%), との回答が得られ(図3)、未記入者は5名であった。子どもに説明できたと評価した養育者は全体の68%と高く、できなかったと評価した養育者はわずか3%であり、全体的に高い傾向にあった。

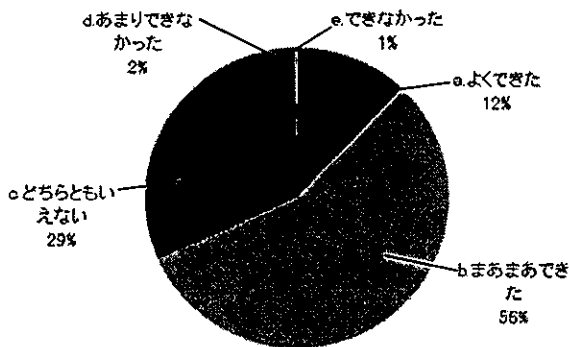


図3. 命の尊さを子どもに説明できたかの自己評価. n=283

2) 「命」の説明がしやすい順は「人→動物→植物」

次に、iv) 植物・動物・人(兄弟や親せき)、のうち、どれが一番説明しやすいですか?その理由も教えてください、との設問では、a. 植物4名、b. 動物138名、c. 人(兄弟姉妹や親戚など)176名、との結果が得られた。命の説明を全くしない家庭はなく、比較的説明できていると自己評価している養育者のなかで、動物と人に大きな差はみられなかった。複数回答者で動物と人の両方を選択した人が30名いたが、植物は複数回答でも選ばれておらず、植物を選んだ人が4名と極端に低い結果となった(図4)。

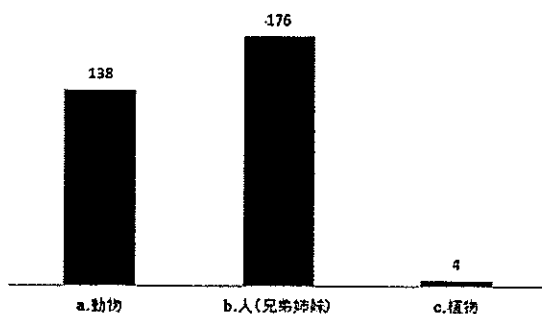


図4. 養育者が思う命の説明のしやすい対象. n=318(複数回答)

(1) 植物を選んだ理由

回答者4名のうち1名は未記入、2名は、「育てたことがあるため」「実際に子ども達も種まきから育てたことがあるので」と書いていた。特別な理由が書かれていないことから、動物を飼った経験がなく、兄弟姉妹もいないので植物を選んだのではないかと推察される。

具体的なエピソードを記入したのは1名だけであった。「水やり(栄養剤)、室内のものなら日光に当てるなど、

愛情をもって育てないと枯れてしまう(死んでしまう)、きれいなお花、緑の葉はもう見れない。大切にしないといけないのが伝えやすい」と、詳細が記載されていた。

(2) 動物を選んだ理由

「動物」と回答した108名をみると、動物を飼っている家庭と飼っていない家庭では、実体験によるものと一般的な情報によるものとの違いがあった。

たとえば前者では、「飼っていた犬がなくなった時」「動物を飼っているので一番説明しやすい」「子猫を拾ってきた時、自力で何もできない子猫に何をしあげられるのか、と話し合い、その命を守るために必死になって世話をすることがあって」など、動物を実際に家庭で飼う時、あるいは育てる過程のエピソードが書かれていた。また後者では、「身近にいて、実感しやすい。守るべき存在なので」「日常的に命のうまれるのも消えるのも見る機会が多い為」「子どもが動物好きなので本やTVを通して」などの理由が書かれていた。

(3) 人を選んだ理由

次に、「人」と回答した146名の理由をみてみると、「植物、動物よりも人の方が自分自身の事だから。植物、動物の気持ちになって考えるのはむずかしいと思う」「家族という一番かけがえのない存在の命の尊さをテーマにする」と説明しやすい(ペットを飼っていないので)「身近にいる人で説明すると子供も分かりやすいから」「祖母の死を体験しているため」などの回答が得られた。「命の尊さ」から連想した「命」が「人の命」と推察される記述が多かった。

(4) 人と動物を選んだ理由

設問は「植物」「動物」「人」、これらから一つだけ選んでもらうものであったが、動物と人どちらも選んだ人が数人いた。

「死というものが植物にくらべて理解しやすいと思うから」「動いていたたり話をしていた人がいなくなるから」「動くもののほうが、感情移入しやすいから」との理由であった。選択回答でも植物が選ばれないことから、動物と人はある程度同等に扱うことができるが、植物は動物や人と同じ視点で考えることが難しいといえる。

3) 養育者が語る「子ども」と「命」の体験

3~4歳頃からの子どもを思い出してもらい、「生命の誕生、あるいは終わりをお子さんと一緒に経験したことはありますか?」の回答結果は、a. 経験がある 205名、b. 経験がない 83名であり、それぞれの養育者が思う子どもの感受性の平均値は、7.7と7.5であり、ほとんど差異はなかった。生命の誕生と終わりでは、生命の終わりの方が命の大切さを伝えやすいとの意見が多かった。

また、経験があると回答した205名のうち、具体的なエピソードと子どもの感情などについて詳細が書かれていたのは11名であった。「植物」「動物」「人」それぞれの生命の誕生と終わりを自由記述してもらった結果、生命の誕生にかかわるエピソードは2例、生命の終わりに関するエ

ピソードは 11 例であった。そのなかでも、ペットや祖父
母との死別によって悲しみや感謝の気持ちを養育者が子
どもと一緒に共有したエピソードが 10 例、植物が枯れた
時に子どもが大泣きして養育者が驚いたエピソードが 1

例であった。

さらに、養育者が評価する子どもの「感受性」の平均値
は 7.6 であるのに対して、上記のエピソードを書いた養育
者の評価の平均値は 9.1 であった（表 1）。

表 1. 植物・動物・人の生命の誕生や終わりを経験したと答えた養育者の具体的なエピソードと子どもの感受性に対する評価。

回答者	養育者が記述した具体的なエピソード		経験した対象			感受性 (VAS値)
	生命の誕生	生命の終わり	植物	動物	人	
A	ペットのハムスターを埋葬して、そこから花が咲いて感動した。	・花瓶の中の花を見て、いずれ枯れてしまうことに疑問を持った子どもに、命には始まりと終わりがあることを話した。 ・犬の介抱に毎日、祖父母宅へ。火葬場では嗚咽する程泣き、「今までありがとう」と感謝して手を合わせた。	○	○	○	10
B	一度枯れたバラに愛情込めて育てたら、たくさん花が咲いて感動した。	左足のバラが誰かのイタズラで花を全部切られ、子どもは「花も生き物なのに！」と大泣きした。	○			10
C	保育器に入っている妹に、自分の大事な車のおもちゃを妹の手に握らせていた。	どこへ行くにも(旅行にも)一緒に連れて歩いたカブトムシの死。人に踏まない所を探して埋葬した。	○	○		10
D		祖母の告別式の際、大声で泣いていた。普段あまり涙を見せない子なのでとても驚いた。			○	9
E		父方の祖父が亡くなり、泣きながら挨拶をしていた父を見て子どもは、もし自分の親が死んでしまったら、と考えるようになった。			○	10
F		子どもと実家へ遊びに行った次の日に祖父が亡くなる。とてもショックだった。			○	9
G	球根や種から育てていた花が咲いた時、近所の子にボールを当てられ萎ごと折れてしまっで悲しんだ。		○			9
H		祖父宅の猫が弱って入院し、元気がない姿を見て祖父が泣いていたことが子どもには印象深かったようだ。		○	○	9
I		大切にしていたザリガニの死から、自分の世話が十分でなかったことを振り返り、悲しんだ。今も思い出してはその話をする。		○	○	6
J		同居していた祖父の死。病気で苦しむ姿を見て、悲しいのと苦しみから解放されたのと複雑な気持ち。		○	○	9
K		ハムスターのだんだんと弱っていく姿に声をかける。「うちに来てくれてありがとう」と涙を流し埋葬した。		○		9

4. 植物を育てる教育の課題と問題点

1) 植物の命を日常で感じることは難しい

アンケートの回収率を学年別でみると、4年 66.4%、5年 60.3%、6年 68.6%であり、どの学年も6割以上の回答が得られた。本アンケート調査では、「子どもに命の尊さを伝え教えるためにはどのような教育方法が適しているか」を調査する目的であることを伝えているため、回答した養育者は子どもの教育に対して無関心ではないと推察できる。

「家庭で(子どもに)命の話をしなさい」と答えた養育者が0%だったことからわかるように、本研究の協力者(回答者)は育てる教育に対して比較的関心が高い。にもかかわらず、植物を育てる思想を子どもに指し示していると窺い知ることができた養育者は、288人中1名であり、極端に低い結果となった。

さらに、実際の体験から養育者が日常生活のなかで子どもにどのように「育てる」ことを指し示しているのかを自由記述によって探った結果からも、植物を「生きもの」として扱い、子どもとその「命」を共有している体験を語った養育者は極めて少ない。

以上の結果から、植物の「命」を日常生活で感じている養育者が少ないうえ、植物の「命」を子どもと共有している養育者はほとんどいないことがわかった。一般的に植物

は「生きもの」として認識されることは少ないといえる。

2) 植物を動物や人と同等に扱うことは難しい

「植物、動物、人(兄弟や親せき)、のうち、一番説明しやすいのはどれですか?」の回答では、動物は「日常的に命のうまれるのも消えるのも見る機会が多い為」「人は身近にいる人で説明すると子供も分かりやすいから。」との自由記述が多くみられた。

「動物や人は感情移入がしやすいが、植物は感情移入しにくい。」との意見が多いことから、一般的に、私たちは動物や他人の立場になることができても、植物の立場になって考えることは難しいことがわかる。なぜなら、動物や人は声を発する、近づいて来るなど、動きや意思表示がある。世話するのを忘れていても対象から気づかされることが多い。

しかし、植物は自ら移動して水や栄養を求めたりしない。世話する側が意識していないと植物の小さな(静かな)変化に気づくことができない。小学校の理科教育などで「動植物の世話」とされるように、植物と動物は同等に扱われることが多いが、植物を育てることと動物を育てることは区別して考えるべきではなからうか。

3) 植物の「終わり」を特別に感じることは難しい

生命の誕生と終わりでは、生命の終わりの方が命の大切さを伝えやすいとの意見が多かった。さらに、生きものを

育てる過程で強く印象に残るのも、「終わり」であった。

また、自由記述からは、近親者の死にかかわらず、犬やカブトムシなどが亡くなったときに「埋葬する」という行動がとられている。養育者がペットや祖父母との死別などを通して、子どもと悲しみや感謝の気持ちを一緒に共有することが、養育者の心に深く印象づけられる体験になっていると推察できる。

このことからわかるように、動物や人は感情移入しやすいため、その生命の「終わり」を迎える時には大きなストレスが伴う。一般的にそのストレスを避けるために、つまり「終わり」を迎えたくないという防衛本能から、「育てる（世話する）」行動が誘発されやすい。逆にいえば、これは今後の研究課題だが、植物は季節の移ろいと共に芽吹き、落葉し、休眠することを私たちは無意識に感じていることから、植物の「終わり」というものを特別に感じにくいのではなかろうか。

一方、本調査で唯一、植物を生きものとして扱っている養育者のエピソード（表1.B）によると、枯れそうになったバラを愛情込めて再生させたにもかかわらず、イタズラで折られてしまった子どもが「花も生き物なのに！」と大泣きしている。これは、養育者が植物を生きものとして扱い、子どもと一緒に植物を見守り育てる行動を行っていたからこそ、子どもに植物を「育てる（世話する）」思想が育まれていると推察できる。

まとめ

本研究では、一般的に植物は「生きもの」として認識されることは少ない要因として、養育者が植物を生きものとして扱い、子どもと一緒に植物を見守り育てる行動を行っ

ていることが少ないことが挙げられる。

次稿では、なぜ園芸療法に「育てる」教育が重要かを論じたい。

謝辞

本研究の実施にあたり、神奈川県横浜市南瀬谷小学校の教諭ならびに養育者各位と生徒の皆さんにアンケート調査のご協力をいただきました。心より感謝いたします。

引用文献

- 藤岡真実・若野貴司・嶺井 毅・浅野房世. 2010. 園芸の特徴を活かした療法とは何か—その考え方と実践の視点—. 人間・植物関係学会雑誌 10(1) : 9-14.
- 広辞苑 第5版. 2004. 新村出編. 岩波書店.
- 松尾英輔. 1986. 農芸教育の提唱(1). 日本農業教育学会誌 17(2) : 1-5.
- 松尾英輔. 1990a. 農芸教育の提唱(2). 日本農業教育学会誌 21(1) : 19-24.
- 松尾英輔. 1990b. 農芸教育の提唱(3). 日本農業教育学会誌 21(1) : 25-30.
- 松尾英輔. 1995. 農芸教育の提唱(4). 日本農業教育学会誌 26(2) : 69-74.
- 松尾英輔. 2010. 農芸教育の提唱(5). 日本農業教育学会誌 41(2) : 75-84.
- 文部科学省. 2008. 小学校指導要領解説 理科編.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syokaisetsu/index.htm
- 文部科学省. 2010. 学校教育法施行規則別表第1(第51条関係).
<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/S22/S22F03501000011.html>